



新築となった鳥居大鳥居から二荒山神社を望む

池辺郷と二荒山神社

郡部宇都宮は、はじめ二荒山神社（宇都宮明神）の門前町として起った。神社は白が峰とよばれる丘に鎮座しているが、かつては峰の稜線が南方に延び、その先端の荒尾崎（馬場通り交番通り・摂社下之宮近く）に祀られていた。

白が峰を取り囲む低地は、田川・求食川、茶川などによってできた湿地で、沼や池などがあつたので、古代には「池辺郷」と呼ばれ、とりわけ「MEGAドン・キホーテラパーク宇都宮店」辺りには蔵が池という大きな池があり、その西に続く微高地は今も池上町の町名として残っている。

二荒山神社の創始年代は不詳だが、豊城入彦命が大和国から下つて東国を支配し、その四世の孫奈良親王が下毛野國の国造（地方首長）になると、荒尾崎に祖神豊城入彦命を祀つたのが始めといわれ、承和五年（八三八）、荒尾崎からより高麗な現在の白が峰に遷座したという。

神社は、平安時代末期から中世にかけて、「宇都宮」「宇都宮明神」などと呼ばれていたが、門前町として開けた宇都宮は、これに由来する地名であろう。



石段から二荒山神社を望む（下之宮）

二荒山神社と宇都宮氏

宇都宮の地名発祥の由来ともなった藤原宗円から始まる「宇都宮氏」。平安時代末期から中世にかけて、「宇都宮明神」と呼ばれた二荒山神社。この二つが、現在ある宇都宮の始まりだった。

栃木県考古学会顧問 嶋 静夫

その後、東国平定の伝承などから、二荒山神社は武神として崇められ、藤原秀郷は平将門の乱の際、当社に平定を祈願し、

さらに天壽元年（一〇五三）、源頼義・義家父子は、陸奥の豪族安倍氏の反乱を鎮定する際、戦勝を祈願し、これに随行した藤原宗円は、氏家藤山の地で調伏祈禱を行った。その甲斐あつて鎮定できた功績によって、二荒山神社の社務職（神社祭祀の統括者）になつたという。

これを機に康平六年（一〇六三）、宗円は神社の真南〇・八の地（宇都宮城址公園辺りか）に館を築いて土着したので、神社と居館とは南北に並び、馬場道によって繋がっていた。



宇都宮一族の活躍

宗円を祖とする宇都宮氏は、平安時代後期の11世紀中ごろ、宇都宮を拠点として勢力を張り、鎌倉時代には幕府要職の

評定衆・引付衆に列する有力御家人として活躍したので、この時代に宇都宮氏は早くも最盛期を迎えた。

中世下野の三大豪族（宇都宮・小山・那須氏）のうち、小山氏が武断の性格の強い武士であるのに対し、宇都宮氏は「荒山神社の神官を兼ねるなど、文官的色彩の濃い武士であった。特に当時、京都歌壇、鎌倉歌壇に対して、宇都宮一族を中心として宇都宮歌壇が形成され、京都・鎌倉の文化人との交流によって、宇都宮氏の名は全国的に知れわたつた。一族などの和歌を収めた歌集に「新〇和歌集」がある。

この歌集に深く関わつた五代頼朝は、北条時政の娘を妻とし、北条氏との結びつきを固めたが、ある謀反の嫌疑を受けて出家

